茨城大学全学教育機構論集　大学教育研究　第 5 号（2022），21-40

大学生が英語絵本の読み聞かせ活動を通して得たもの

－常磐大学における 3 年間の試み－

大津　理香*・辻川　美和**・佐竹　正夫***

（2022 年 2 月 2 日 受理）

Voluntary Reading of English Picture Books to Children

- The Influence upon Tokiwa University Students (2014 -2016) -

Rika OTSU*, Miwa TSUJIKAWA**, and Masao SATAKE***

(Received February 2, 2022)

Abstract

This paper reports the influence upon Tokiwa university students who volunteered to read English picture books to children at a nursery school from the academic year 2014 to 2016. The students regularly practiced English pronunciation and songs as well as reading English picture books aloud in preparation for visiting a nursery school. The main focus of this paper is to report and discuss the activity in the academic year 2016 with the questionnaire result answered by the volunteer students. The second focus is to summarize the influence of this activity upon the volunteer students with the total three-year (2014-2016) questionnaire result answered each year by the volunteer students. The questionnaire has items to ask about their attitudes toward English learning, children, regional contribution, English picture books, and English education. The results showed a positive impact on the volunteer students: they could increase their opportunity to use English and their motivation to learn English, they could find the attractiveness of picture books by contact with local children, and so on. This voluntary activity did not only make children joyful but also gave the students an authentic learning experience.

キーワード：英語絵本、読み聞かせ、英語教育、大学生ボランティア

１．はじめに

2020 年度から、小学校 5、6 年生の英語は週 2 コマ年間計 70 単位時間の教科となった。英語に慣

* 茨城大学全学教育機構　** 目白大学外国語学部英米語学科　*** 東北大学名誉教授

れ親しむことはもちろんのこと、「聞く、話す」に加えて、「読む、書く」にも焦点があてられている。3、4 年生には、外国語活動として週 1 コマ 35 単位時間が与えられるようになった。英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことが主な狙いとされている。

このような英語教育の早期化により、子どもの英語教育への保護者の興味や期待が年々増していることや、英語絵本の読み聞かせが小学校の外国語活動や地域の図書館等でも取り入れられていることは、筆者らの「大学生による英語絵本の読み聞かせ」に関する論文で紹介してきたところである（大津・辻川. 2015；大津. 2020；大津. 2021）。筆者らがこの研究を始めた背景には、英語教育の早期化の流れの中で、英語学習者である大学生による英語絵本の読み聞かせ活動も社会で受け入れられる余地があるのではないかと考えたことにある。

そこで、筆者らが勤務していた常磐大学で、2014 年度から国際学部英米語学科の学生たちに呼びかけて、近隣の保育園や幼稚園で英語絵本の読み聞かせ活動を始めた。この活動は、子どもたちとの触れ合いを通して、学生自身が英語や（児童）文学に対する興味や理解を深め、英語教育や地域貢献への意識等を高めるよい機会になると考えられた。これらの点を学生がどう考えたのかを明らかにするために、活動終了時に 55 の多岐にわたる質問項目を含むアンケート調査を実施した。

2015 年度からは大津が他大学に異動したために、活動は辻川が中心となって行い、2018 年度まで継続した。ただし、2017 年度以降は常磐大学の学部改組などの事情により参加学生が減っており、アンケート調査は行っていない。アンケート調査に基づく活動の成果については、2014 年度が大津・辻川（2015）で、2015 年度は大津（2021）で報告している。アンケート調査を行った 2014 年度から 2016 年度までの間、活動に協力してくれた学生は一時的な参加も含めて延べ 25 名になった。この中でアンケートへの回答数は延べ 17 であり、これは英米語学科の 3 年間の在籍者数の約 4%に相当する。

本稿は、2016 年度の活動を報告するとともに、2014 年度から 2016 年度までの 3 年間の活動を通して学生がこの読み聞かせ活動から何を得たのかを明らかにする事例研究である。第 2 節では、初めにこれまでに確認できた図書館等で実施された大学生による英語絵本の読み聞かせ活動の事例を紹介し、次に英語絵本の読み聞かせに関する先行研究や報告を要約する。先行研究は二つに分かれる。一つは、読み聞かせられる子どもの英語習得効果についてであり、多くの研究がこのテーマを扱っている。他は、読み聞かせる大学生自身への影響についてであるが、この研究は少ない。第 3 節では、常磐大学における 2014 年度と 2015 年度の活動とその結果を要約する。第 4 節では 2016 年度の活動を取り上げ、活動概要と調査方法、そしてアンケート調査の結果を示す。第 5 節では、2014 年度から 2016 年度の 3 年間のアンケート調査をまとめて見ることにより、このような読み聞かせ活動が読み手の学生にどのような効果を与えるのかについての結論を述べる。最後に、アンケート調査を実施しなかった 2017 年度と 2018 年度の活動についてふれ、今後の課題を述べる。

２．大学生による英語絵本読み聞かせの事例と関連する先行研究

2-1. 大学生による英語絵本読み聞かせの事例

英語絵本の読み聞かせの実施例には、家庭や営利目的を除けば、小学校での外国語活動や教科の中で行われる場合、幼稚園や保育園での実施、そして図書館や国際交流会館などでの例がある。こ

れらの中で、特に大学生が読み聞かせを行った例としては、すでに大津（2020, 2021）の研究で紹介した広島国際大学にある学生主体の呉イングリッシュクラブの活動や恵泉女学園大学の「児童英語教育実践」の授業の一環として実施されたものがある。本論文で初めて紹介する例としては、関西国際大学[1)]、文京学院大学[2)]、京都光華女子大学[3)]がある。

学生が近隣の図書館や書店へ出向いて実施した事例としては、皇學館大學のコミュニケーション学科の学生による活動、信州大学の「英語学応用演習」の授業と地元の図書館との共同プロジェクト、名城大学の外国語学部にあるゼミの学生による書店での活動がある。他には、大学に子どもたちを招いて読み聞かせ会を実施した例に、熊本県立大学の英語英米文学会の活動、聖心女子大学、東京都市大学の活動などがある。大学生が子どもへ英語絵本を読み聞かせる例はこの他にも多くあると考えられるが、活動場所は、保育園、図書館、大学、小学校、書店など多岐にわたっている。なお、茨城県の図書館において、大学生が読み聞かせを行った事例として、2018 年 6 月に茨城県立図書館において茨城大学の学生が英語絵本の読み聞かせを行った例がある[4)]。

2-2.　先行研究

2-2-1. 英語絵本読み聞かせによる子どもの英語習得に関連する研究

英語絵本の読み聞かせによる子どもへの効果等を調査した研究は、筆者らの研究ですでに紹介したが、ここでは日本で行われた主な研究や報告を改めてまとめ、表 1 に示す。本論文で初めて紹介するのは、小玉・キッド（2016）、内山・染谷（2020）と河内山（2021）である。

表 1　子どもの英語習得に関連する研究

萬谷（2009）	児童の発話量を増加させる要因となる教師の読み聞かせ方法を示したもの
佐藤・佐藤（2010）	小学校の児童はどのような読解ストラテジーを使って英語絵本の内容を理解するのかを調査した研究
松浦・伊東（2012）	小学校 5 年生を対象に英語絵本に対する興味や関心を問うアンケートや内容理解やリスニングのテスト結果を基に、英語絵本の読み聞かせが児童にもたらす効果を明らかにしたもの
畑江（2012）	中学校への接続を念頭に、絵本を活用して小学校でも「読む」ことを始めるために具体的指導法を提案したもの
大川（2014）	児童の発達段階に応じた英語絵本の活用法を、小学校の 2、4、6 年生を対象にアンケートやテスト（リスニング・スピーキング）結果から提案した研究
松本（2015）	児童の自発的な反応を促す読み聞かせ方法を示したもの
小玉・キッド（2016）	島根県立大学短期大学部の学生が小学校で英語絵本の読み聞かせを実施し、児童の反応をみた研究
師子鹿（2017）	小学校での英語絵本の活用にあたり研修の必要性や実際の研修の様子を報告した研究
吉村 他（2017）	小学生への英語絵本の読み聞かせを効果的に実施するために教師が心得るべき重要なポイントを示した研究
長田（2018）	小学校外国語教育に従事した経験を有する 8 名へのアンケート調査により、小学 3〜6 年生に適する絵本の提案を行った研究
田中・小野（2018）	信州大学教育学部附属松本小学校において英語絵本の読み聞かせが児童の英語に対しての能動的な態度や親しみを育んだことを報告したもの
オチャンテ（2019）	教職課程履修用の英語科指導法クラスで、履修学生が読み聞かせを行い、教育実習での活用について考察したという事例報告
内山・染谷（2020）	小学校 5 年生の児童に対し英語絵本を読み聞かせることで、児童の文字の理解や学習意欲がどのように変化するのかをみた研究
河内山（2021）	小・中・高の英語教育での絵本の活用の可能性を探ることを目的にした予備研究

小玉・キッド（2016）は、島根県立大学短期大学部の学生 15 名が松江市乃木小学校で 5 年生 5 学級に対して英語絵本の読み聞かせを実施し、その後聞き手である児童 154 名に英語や海外の文化への関心についてアンケート調査をした。その結果、学生の読み聞かせが児童に好意的に受け取られ、読み聞かせの継続を希望されたこと、そして英語や外国への興味も非常に高まったことがわかっている。

内山・染谷（2020）は、小学校 5 年生の児童 27 名に対し「朝読書」の時間を利用して英語の絵本を読み聞かせることで、児童の文字の理解や学習意欲がどのように変化するのかを調べている。読み聞かせ前後のアルファベット及び単語のテストと動機づけに関するアンケート結果によれば、英語の大文字・小文字とも児童にとって書ける数が有意に増加したこと、英語絵本を用いることで英単語に興味関心を示し内発的動機が高まったことが示された。

河内山（2021）は、小・中・高の英語教育での絵本の活用の可能性を探ることを目的に、2020 年度に和洋女子大学の授業「視聴覚コミュニケーション」を受講した学生 45 名を対象に予備研究を行っている。授業では、学生がジェンダーと絵本に関する質問について考えを共有したり、絵本の黙読・音読をしたり、和訳をしたりと様々な活動が行われた。その後、ジェンダーに関する意識や英語の絵本を授業に活用することについての質問に対して学生から回答を得ている。英語の絵本の活用については、学生は絵本のイラストがストーリーの理解を助けることが最も大きいメリットだとあげている。また、英語のフレーズや語彙、英文法の学習の他、学習意欲の促進、異文化理解、思考力の発達、および英語への苦手意識の軽減という意味で絵本が有益であるとしており、幼稚園から中学以降の英語教育にも期待できるとしている（p.50）。

2-2-2. 英語絵本読み聞かせを行う大学生への教育効果に着目した研究

この研究についても、すでに大津らの研究で紹介したが、ここではそれらに加え、新たに松井（2017）と昆布（2015）を紹介し、併せて大津（2020）のいわき明星大学（現　医療創生大学）における活動に関する研究も紹介する。最後に大学の英語教育において教材として英語絵本を用いる授業の実践報告を紹介する。

読み聞かせを行う大学生への教育効果を扱う研究は、小学校での読み聞かせ活動が多い。その他には、図書館で読み聞かせを行うもの、学内の授業で互いに読み聞かせを行うものがある。

小学校での読み聞かせを扱った研究には、松久保（2009）、狩野・Gould（2010）、小玉・キッド（2014）、松井（2017）、大津（2020）がある。松久保（2009）では、学生が東京都内の公立小学校で実際に授業を行う桜美林大学の児童英語教育支援プログラムの活動を扱い、学生の成長を報告している。この活動後の学生のレポートには、達成感や、指導方法についての学びに対して肯定的な感想があらわれている。狩野・Gould（2010）では、上智短期大学が行っている地域の小学校における児童英語教育ボランティア活動の取り組みと成果が報告されている。学生へのアンケート結果によれば、学生が自分の英語力の未熟さを感じていることが見てとれるものの、ボランティア活動の経験が自身の学びや成長に繋がったと概ね肯定的な反応を得ている。

小玉・キッド（2014）では、島根県立大学短期大学部の「幼児・児童を対象とした英語教育」のプロジェクトを扱っている。この活動では、学生は子どもたちに歌を歌ったり、紙芝居や絵本を読み聞かせたり、英語を使ったゲームを行っている。小玉・キッドは、この活動を通して学生がどのよう

に成長したかを教師の視点や学生の感想をもとに報告している。学生は、英語やコミュニケーションについて様々な気づきを得て、正しい発音の重要性を認識し、また文中の強弱やイントネーションへの意識が高くなったとのことである。

松井（2017）は、岡崎女子短期大学幼児教育学科の松井ゼミナールの活動を報告している。ゼミでは、保育者を目指す学生が、岡崎市内の根石小学校を訪問し、1 年生の児童に対して動物の名前を英語で教えたり英語遊びをしたり、英語絵本の読み聞かせを行ったりした。学生のレポートには、子どもとの関わりは、英語の楽しさを伝える方法を深く考えるようになり、学生自身の視野を広げるよい機会になったと記されている。

大津（2020）では、いわき明星大学の学生が、小学校で日本語の絵本の読み聞かせをする地域のボランティアグループに交じって行った英語絵本の読み聞かせ活動を扱っている。活動は本稿で扱う常磐大学のそれとほぼ同じであったが、小学校で行い、対象とする学年も 2 年生から 6 年生までで、学生が選んだ絵本に合わせてクラス配置がなされている。アンケート調査以外に活動前と終了後に学生の読み聞かせをビデオ撮影し、それを教員が評価した。この活動を通して、学生の英語学習等の意欲が向上し、実際の英語の発音や抑揚等が改善されたことがわかっている。

図書館での読み聞かせに関する研究には、川村（2018）がある。川村は、伊勢図書館における皇學館大學の学生ボランティアによる読み聞かせ後の感想から、学生が英語学習の必要性と子どもとのコミュニケーションの大切さを感じたことを報告している。また英語の絵本を理解することは異文化を学ぶことやプレゼンテーション力の訓練になることを指摘している。

以上の研究に対して、実際に子どもの読み聞かせ活動を行っていない研究もある。城一（2015）は、江戸川大学の授業の一つである「LR　Reading I」において、履修学生が学生同士で英語絵本を読み聞かせすることにより、聞き手や音読への意識を高めることになったと報告している。昆布（2015）の研究は、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部の幼児教育学科の学生 101 名に対して教員が英語絵本の授業（音読、リピート、絵本作り等）を行い、事後のアンケート調査により学生の英語に対する意識を調査したものである。アンケートは、保育現場で使える英語力、保育英語検定、英語絵本を正確に読む力、また他にも聞く・書く力についての意識を尋ねるものである。結果として、英語の絵本は学生の英語学習への苦手さやつまずきを克服させて、幼児教育現場でも活用できるといった学生の前向きな気持ちを引き出したことがわかった。

以上が、過去約 10 年の英語絵本の読み聞かせに関する事例や研究・報告である。英語絵本の読み手となり得る大学生への教育効果に関する研究は、聞き手である子どもたちに関する研究に比べると少ないものの、全国で着実に進んでいるようである。これは「英語絵本の読み聞かせ」が 2020 年度から始まった小学校の外国語活動の中で文部科学省が重要な教育方法と位置付けていること [5)]、そして「感情を込めて絵本の読み聞かせができる」ことを小学校の外国語指導者に必要な資質や能力の 1 つとして挙げている（早川. 2021. p.267）ことを反映しているであろう。

「英語絵本の読み聞かせ」は、大学の共通教育としての英語の教材としてはまだ一般的ではないが、小学校の教員を対象とする教育学部などでは、「読み聞かせ」を題材とした教育が行われている。そのような教育実践に基づいた研究報告として、先に挙げた研究の他に昆布（2013、2014）や早川（2015、2021）などがある。

３．常磐大学における 2014 年度と 2015 年度の活動のまとめ

常磐大学における英語絵本の読み聞かせ活動は、前節で紹介した研究で扱われた活動のうち、子どもに直接読み聞かせを行う活動にあたる。ただし、取り上げた研究のほぼすべてが小学生を聞き手としていたのとは異なり、聞き手は保育園および幼稚園の幼児である。すでに物心ついている生徒が対象である小学校での読み聞かせや、保護者側からの期待が大きいと思われる図書館での読み聞かせと異なり、読み手の英語力への期待はほぼ無いに等しい。保育園では、ボランティアとして読み聞かせをする学生達を温かく受け入れる雰囲気があった。英語力に自信がない大学生が活動する場としては、その他の場所での読み聞かせと比べてハードルが低く、学生の受けるプレッシャーが少ないという点に特徴があったと思われる。

また、従来の活動が大学の授業やカリキュラム内での活動であったのに対し、常磐大学の活動は、教員や学生が、読み聞かせの練習から実践まですべて空き時間にボランティアとして行っているところにも特徴があった。

3-1. 2014 年度の活動

2014 年度は、国際学部英米語学科の学生 5 名（1 年生 2 名、2 年生 2 名、4 年生 1 名）と教員 2 名（大津、辻川）が、5 月より月に 3 回約 1 時間ずつ、英語の絵本の音読練習や苦手な発音の練習、そして英語の歌の練習をし、月に 1 回 40 分程度、学生 3 名と教員 2 名で近隣の保育園に出かけ、5 人から 10 人の園児たち（2 歳から 4 歳児が中心）と一緒に英語の歌を歌い、絵本約 3 冊を読み聞かせた。

絵本は教員が準備した本の中から学生が読みたい本を自分で選んだ。それらは、Oxford Reading Tree の Stage 1 から 5 まで、Eric Carle の *From Head to Toe*、*Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* *The Very Hungry Caterpillar*　などである。

9 月末には地域のイベント（水戸市まちなかフェスティバル）に出展し、訪れた親子に対して読み聞かせを行った。授業期間中には計 10 回の活動を行い、夏休み中にはイベント出展前であったこともあり、練習を 8 回行うとともに保育園でも読み聞かせを実施した。イベント後の 10 月にアンケート調査を行った。

アンケートでは、まず参加者の英語力の情報（取得した英検や TOEIC の点数）と、これまでのボランティア活動や子どもとの触れ合いの経験について尋ねた。次に、「英語についての意識、英語に関する能力、意欲」（27 項目）、「子どもへの意識」（5 項目）、「地域貢献への意識」（5 項目）、「文学的な能力・興味」（13 項目）、そして「英語教育への意識」（5 項目）の五つの分野について、全部で 55 項目の設問に「そう思わない、やや思わない、やや思う、そう思う」から該当するものを選択するようにした。そして、各選択肢にそれぞれ 1 点、2 点、3 点、4 点として点数を与え、設問ごと、分野ごとに集計して平均値を算出した。

設問には情意面に関するもの（「1. 英語が好きになった」「32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる」「35. 地域貢献へのさらなる興味がうまれた」「38. 英語の絵本への興味が増した」「52. 英語教育にも興味が湧いた」など）と技術面に関するもの（「14. 英語の語彙が増えた」「22. 英語のスピーキング力がついた」「43. 絵本の英語のリズムに気づくようになった」など）がある（全体は添付資料を参照されたい）。上述の例にもあるように、いずれの設問も

肯定的な回答（そう思う、やや思う）は、情意面であれば、英語や地域貢献、又は文学や英語教育への意識や関心が高まったことを、そして技術面では英語力などがついたことを意味する。それゆえ、平均値が高い項目は、学生がこの活動から得ることが大きかったと感じていると解釈される。最後に自由記述欄を設け、読み聞かせ活動を経験して変わったことがあるか、または役に立ったことはあるかについて尋ねた。

アンケートの結果は、全体の平均値が 3.4 であり、分野ごとのそれは第 5 節の表 4 に示されている。すべての分野で平均値は 3.0（やや思う）以上であり、参加者が活動から得ることが大きかったと解釈できる。

3-2. 2015 年度の活動

2015 年度は、一部の時期のみ活動に加わった学生 2 名を除き、英米語学科の学生が 4 名（2 年生 3 名、1 年生 1 名。2 年生 2 名は 2014 年度からの継続者）と教員 1 名（辻川）が年間を通して活動した。2014 年度と同様、月に 1〜3 回約 1 時間ずつ集まって、同じ保育園での活動に備えた。そして月に 1〜2 回、合計 10 回保育園での読み聞かせ活動を行った。2014 年度とは違い、地域のイベントには参加しなかった。代わりに夏休み期間中に教員（辻川）のゼミ生と合同で一泊二日の英語強化合宿を実施した。これには大津も参加した。そこでは英語学習の他、英語絵本の読み聞かせのメンバーが読み聞かせを実演して見せて、ゼミ生や教員（辻川、大津）から感想や意見を貰うなどした。

読み聞かせに用いる絵本は、前年度よりも子どもたちに人気の大型の絵本の種類を増やし、Oxford Reading Tree シリーズの作品や Eric Carle の作品の他、ハロウィーンやクリスマスなどのイベントの季節に合ったものや日本でもなじみのある話の英語版なども広く取り入れた。

活動終了後に 2014 年度と同じアンケートを実施した。また、継続の 2 名には、「英語絵本の読み聞かせ活動を 2 年間継続してみて 1 年目と変わった点はあるか」という質問を自由記述欄に追加した。アンケートの結果、全体の平均値は 3.3 であり、2014 年度とほぼ同じ値である。各分野のそれは後述の表 4 に示されているが、これも前年度同様、どの分野も 3.0 以上となっている。しかも、二つの年度の全体の回答間の相関係数は 0.74 で、回答の傾向に強い類似性が見られる（大津. 2021. p.8）。

二つの年度を合わせて、個別の設問項目に着目すると、9 名全員が肯定的な姿勢（平均点が 3.9 もしくは 3.8）をみせた設問項目には次のようなものがある。

7. 英語の単語の意味や文法に気をつけるようになった/ 8. 英語の辞書を引くようになった/ 13. 英語に触れる機会が増えた/ 27. もっと英語を勉強したくなった/ 30. 自分の知っている英語の面白さを子どもに伝えたいと思った/ 31. 子供の期待に応えるために頑張っている自分がいる/ 32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる/ 36. 他の学生とともに地域の子どもたちのために活動することが楽しくなった/ 39. 英語の絵本のストーリーのおもしろさが理解できるようになった

ここには、学生同士で励ましあいながら、自分たちの読み聞かせを待っている子どもたちのために発音練習や音読練習を含む英語学習を進めてきた結果が表れている。

４．常磐大学における 2016 年度の活動

4-1. 活動概要

2016 年度の英語絵本読み聞かせ活動の参加者は、英米語学科の学生 14 名（1 年生 9 名、2 年生 1 名、3 年生 3 名、4 年生 1 名）であり、3 年生 2 名と 4 年生 1 名は 2014 年度からの継続者、2 年生 1 名と 3 年生 1 名は 2015 年度からの継続者である。4 月に 1 回のミーティングを実施した後、約 2 か月間はほぼ全員が活動に参加していたが、7 月初めの保育園での読み聞かせを最後に 9 月末までに 1 年生 8 名、3 年生 2 名、4 年生 1 名がこの活動の参加を取りやめ、年度末まで参加したのは、1 年生、2 年生、3 年生 1 名ずつの計 3 名であった。このうち 3 年生 1 名は、途中留学のため 5 か月参加しなかった。

活動内容は、それまでと同様、授業期間中に月に 3 回程度教員（辻川）の研究室に集まり、1 時間程度英語絵本の読み聞かせに必要な発音練習をしたり、子どもたちと歌う歌の練習をしたり、お互いに読み聞かせと助言を行う等の練習を繰り返した。そして毎月 1 回、2014 年度から訪問している保育園に出かけ、30 分程度、2 歳児から 6 歳児（10 名以下のことが多く、また、各回の園児の年齢はまちまちである）を対象に読み聞かせを行った。2016 年度は前年度までと異なり、それらに加えて大学附属の幼稚園でも一度園児たちに読み聞かせをする機会を得た。全体では、5 月、6 月、7 月、11 月、12 月に保育園、1 月に幼稚園で、計 6 回の読み聞かせを行った。保育園では少人数の園児に対して、また幼稚園では 1 クラス 27-8 名の 2 クラスにそれぞれ読み聞かせを行った。

読み聞かせる絵本や活動の流れは基本的に 2015 年度までと同様である。絵本は Oxford Reading Tree シリーズのステージ 1+から 3 を中心に、*Dear Zoo*、*The Very Hungry Caterpillar* などの定番絵本や、数を数えたり、色や形を教えたりするための絵本なども含む計 24 冊が使われた。絵本はすべて読み聞かせを行う学生自身が選び、読み聞かせはすべて大型絵本を使って行われた。学生は絵本を読むだけではなく、簡単な英語を使って絵の説明も行うのだが、説明は練習の時に学生自身が何を言うか考えて皆の前で実演し、教員や他の学生のフィードバックを元に修正する。また、絵本の読み聞かせの他に、子どもに英語の歌を教えて一緒に歌う活動も引き続き行った。歌は有名な童謡、韻を踏んでいてリズミカルな曲など計 17 曲を学生自身が選び、一回の読み聞かせ活動で 2、3 曲を歌う。対象の子どもたちは毎月同じであるので、基本的には毎回別の曲が選ばれるが、一緒に体を動かしながら楽しく歌える *Head, Shoulders, Knees and Toes* は 4 回、*Hickory Dickory Dock* は 2 回選ばれていた。前年度までと同様、学生は歌詞を暗記するだけでなく、子どもに誰がどのように教えるか、教えるときの英語も含め、事前に何度も練習を積み重ねた。

4-2. 調査方法

2014 年度、2015 年度と同じアンケート調査を 2016 年度の活動終了後に行った。2016 年度は、上記のとおり、読み聞かせ活動に年度末まで継続して参加したのは 3 名の学生だったが、アンケートに回答したのはそのうちの 1 年生と 3 年生の 2 名だった。しかし、途中まで参加した 1 年生 6 名も約 2〜4 か月間の体験を思い出して答えるという形でアンケートに回答したため、計 8 名の学生からの回答が得られた。

4-3. 調査結果

アンケートの結果、55 項目の設問に対する回答者 8 名の全体の平均値は 2.9 であり、2014 年度の 3.4、2015 年度の 3.3 と比べると低い（詳細は添付資料 1 を参照されたい）。しかし、この数字自体は、「やや思わない」（2）よりも「やや思う」（3）に近い値（ほぼ「やや思う」）であるので、2016 年度の活動は参加学生にとっては全体としては肯定的に捉えられていたと言えるであろう。

分野ごとの平均値は 5-1 の表 4 にあるように、英語についての意識等(2.8)/子どもへの意識(3.5)/地域貢献への意識(2.7)/ 文学的な能力・興味(3.0)/ 英語教育への意識(2.4)となっている。これらの値はいずれも前の 2 年に比べると低い。

次に、設問項目の中で、比較的高い（平均値が 3.4 以上）と低い（2.4 以下）の項目を、それぞれ表 2 と表 3 に示す。

表 2　平均値が高い（3.4 以上）グループ

分野	設問項目（平均値が高い順、同点ならバラツキが少ない順に表示）
英語についての意識、英語に関する能力、意欲について	4. 英語の語彙や文法は大切だと思うようになった（3.5） 8. 英語の辞書を引くようになった（3.5） 13. 英語にふれる機会が増えた（3.4）
子どもへの意識	30. 自分の知っている英語の面白さを子どもに伝えたいと思った（3.6） 29. 子どもから学ぶことが多かった（3.6） 28. 子どもが好きになった（3.5） 32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる（3.5） 31. 子どもの期待にこたえるために頑張っている自分がいる（3.4）
地域貢献への意識	該当なし
文学的な能力、興味	41. 英語の絵本の韻（文章中に chair と bear など似た音が一定の間隔で出てくること）に気づくようになった（3.8） 42. 絵本の英語の韻を楽しめるようになった（3.5） 43. 絵本の英語のリズム（韻律）に気づくようになった（3.4）
英語教育への意識	該当なし

表 3　平均値が低い（2.4 以下）グループ

分野	設問項目（平均値が高い順、同点ならバラツキが少ない順に表示）
英語についての意識、英語に関する能力、意欲について	11. 毎日少しは英語を読まないと気がすまない（2.4） 24. 英語の聞きとりがよくなった（2.4） 12. 毎日少しは英語を聞かないと気がすまなくなった(2.3) 5. 自分の英語に自信が持てるようになった（2.0） 10. 毎日少しは英語の音読をしないと気がすまなくなった（2.0）
子どもへの意識	該当なし
地域貢献への意識	該当なし
文学的な能力、興味	45. お気に入りの絵本作家ができた（1.9） 48. 英語の絵本を自分でも書いてみたい（1.8）
英語教育への意識	55. 大学を卒業した後も、英語の絵本の読み聞かせを子どものためにやってみたいと思った。(2.3) 54. 英語絵本の読み聞かせを将来自分の職業にしたいと思った（1.9）

表 2 は、ほぼ全員が「そう思う」「やや思う」の肯定的回答をしたグループである。ここからは、学生が英語に触れる機会を増やせたこと、読み手である子どもたちとの触れ合いを大事にしていること、そして絵本独特の魅力である韻を楽しむことやリズムに気づけるようになったことがわかる。特に、子どもに関する項目は五つのうち全てがこのグループに入っているため、子どもという伝え

る相手の存在は学生にとって大きかったとみられる。

表 3 は、平均値が低い（2.4 以下）回答のグループである。英語についての意識等では、ある程度の時間と習慣がないとそう思えない項目が並んでいる。2016 年度の参加学生は、2 名以外は 3 か月程度しか活動していないため、このような結果になったと考えられる。また、自信をつけるには時間がかかることであろう。

文学的な能力等では、項目 45 と 48 は個人の感性やそれに合った絵本との出会い、いわば偶然性が必要であること、またある程度の時間がないとできないため、全体的に否定的な回答があったのは避けられないことであったと考えられる。英語教育への意識では、特に項目 54 はこれまでの調査結果と同様で、具体的にイメージしにくい項目であったことが否定的回答の原因であると考えられる（大津．2021、p.13）。

これらの二つの表の間に、平均値が 3.3 から 2.5 までの肯定・否定が混ざったグループの回答がある。英語についての意識等では 19 項目、地域貢献への意識では 5 項目、文学的な能力等では 8 項目、英語教育への意識では 3 項目がこのグループに入る。

4-4. 学生と教員の感想

最後に 2016 年度の活動に対する学生と教員（辻川）の感想を紹介する。学生の感想は、自由記述欄（この活動を通して変わったことや役に立ったこと）に記載されているが、その中から代表的なものを示す。

- 子どもとふれあうことで、どのように表現すれば伝えられるかなど、工夫して英語を使うようになった。
- 強くよむところはよんでと強弱がつけられるようになった気がします。発音で、違っていたり、読み方のアドバイスを先生にしていただいたとき、大変勉強になったし、学ぶことが多かった。
- 発音やイントネーションは大事なことに気づき、学ぶことが多少楽しくなれた。
- 教育に対する興味がより深まった。

次は教員の観察に基づく学生の変化についての感想である。先にも述べたように、2016 年度の活動に最後まで参加した学生は 3 名だけであったが、その 3 名は幼稚園での読み聞かせに際し、慣れない新しい場所であることや聞き手の人数が増えたことに緊張しながらも意欲的に取り組んでいた。そして、それまでの経験を活かし、自信をもって教えられる曲や本を選んで熱心に練習し、本番でも堂々と活動できた。子供たちの反応も大きく、教員からも「少し読み方が速いかもしれない」とのフィードバックをもらったほかは概ね評判がよく、学生達も自信を付けた様子であった。特に、1 年以上活動を続けてきた学生は、活動に加わったばかりの頃の暗記したことしか口に出せなかった状態から成長し、本番でとっさに練習していない英語の文章が口に出るまでになっていたことは特筆すべきことであった。

５．常磐大学における 3 年間の読み聞かせ活動のまとめ

2014 年度に「英語絵本の読み聞かせ隊」を発足して以来、筆者達は、学生による地域の子どもたちへの英語絵本の読み聞かせをサポートすることで、子どもたちに喜んでもらうことはもちろん、この日本という EFL の環境で学生が英語を使う機会を増やして英語学習の意欲と英語力を向上さ

せるということを主な目標に活動を行ってきた。本節では、3 年間の学生のアンケートへの回答を集計することで、3 年間の活動によって学生がどのような面で意欲や技術を向上させたかを明らかにする。

5-1. 各年度の分野別と全体の平均値

表 4 は各年度の分野別及び全体の平均値と 3 年間データ（17 名）を集計した添付資料 2 による平均値を示している。この表から次のような事実と考察が得られるであろう。

表 4　分野別の平均値（各年度及び集計）

	2014 年度	2015 年度	2016 年度	集計（3 年間）
英語についての意識、英語の関する能力、意欲について	3.3	3.2	2.8	3.1
子どもへの意識	3.7	3.7	3.5	3.6
地域貢献への意識	3.5	3.3	2.7	3.1
文学的な能力、興味	3.3	3.4	3.0	3.2
英語教育への意識	3.3	3.3	2.4	2.9
全体	3.4	3.3	2.9	3.1
アンケート回答者数	5	4	8	17

第一に、3 年間の集計データによる平均値は全体で 3.1 であり、分野別では英語教育への意識（2.9）を除き、他はすべて 3.0 を超えている。これはこの活動が全体としては学生には肯定的に受け止められたと解釈できる。特に 2014 年度と 2015 年度の活動は、全体も各分野も高い。この活動から学生が得るものが大きかったと言える。この点は学生の自由記述からも明らかにされる。（詳細は、大津・辻川（2015）、及び大津（2021）を参照されたい）

第二に、これらの 2 年間に比べると、2016 年度の学生の評価は明らかに低い。とはいえ、全体の平均値は 2.9 で、これはほぼ「やや思う」であり、前節で述べたように学生の自由記述や教員の感想からもこの活動は学生に前向きに捉えられていると言える。2016 年度の評価が低い要因としては、前節（4-3）でも述べたように回答者 8 名の 2 名を除く学生の活動期間や状況が前年度までと異なっていたことが挙げられる。活動期間は 3 か月と短かった。英語力の伸びを実感するには時間がかかるが、週 1 回 1 時間程度の練習ミーティングを 3 か月程度続けただけでは到底足りない。そして、その間保育園でのボランティア活動は約 1 、2 回で、練習した英語を試す機会が少なかったことも、控えめな自己評価につながったのではないかと考えられる。

第三に、2016 年度とそれまでの 2 年間の平均値は明らかに異なるが、設問項目間の傾向は似ている。2014 年度と 2015 年度を合わせた各項目の平均値と 2016 年度のそれとの相関係数は 0.69 である。このことは、平均値が相対的に高い（低い）項目は他の年度でも同じように高い（低い）ことを意味する。

第四に、分野別では、どの年度でも「子どもへの意識」が高い（全体で 3.6）。これは「読み聞かせ」が自分だけで英語を学習するのではなく、他との交流を通じて学ぶインターアクティブな活動であり、相手が子どもであることは学生にとっては強い学習意欲を呼び起こすことを示している。

5-2. 集計データによる活動のまとめ

ここでは添付資料 2 を用いて、各設問項目の中で特に平均値の高い項目（表 5）と低い項目（表 6）を示す。これによって、この活動から学生が得たものと得られなかったものが明らかになるであろう。表 5 は、3 年間の集計データの中で平均値が 3.5 以上の設問項目を示している。その中でも全員が「やや思う」以上の回答をした項目には＊を付けている。他方、表 6 には、平均値が低い（2.5 以下）設問項目が示されている。

表 5　集計データによる平均値の高い（3.5 以上）設問項目のグループ

分野	設問項目　（平均値が高い順、同点ならバラツキが少ない順に表示）
英語についての意識、英語に関する能力、意欲について	8. 英語の辞書をひくようになった（3.7） 4. 英語の語彙や文法は大切だと思うようになった（3.6）＊ 13. 英語にふれる機会が増えた（3.6）＊ 7. 英語の単語の意味や文法に気をつけるようになった（3.5） 14. 英語の語彙が増えた（3.5） 2. 英語の正しい表現を使うよう意識するようになった（3.5）
子どもへの意識	30. 自分の知っている英語の面白さを子どもに伝えたいと思った（3.7）＊ 32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる（3.6）＊ 31. 子どもの期待にこたえるために頑張っている自分がいる（3.6） 28. 子どもが好きになった（3.6） 29. 子どもから学ぶことが多かった（3.5）
地域貢献への意識	該当なし
文学的な能力、興味	39. 英語の絵本のストーリーのおもしろさが理解できるようになった（3.5）＊ 42. 絵本の英語の韻を楽しめるようになった (3.5)
英語教育への意識	該当なし

＊は、参加者全員が「やや思う」以上の回答をした項目

表 6　集計データによる平均値の低い（2.5 以下）設問項目

分野	設問項目　（平均値が高い順、同点ならバラツキが少ない順に表示）
英語についての意識、英語に関する能力、意欲について	22. 英語のスピーキング力がついた（2.5） 10. 毎日少しは英語の音読をしないと気がすまなくなった（2.4）
子どもへの意識	該当なし
地域貢献への意識	該当なし
文学的な能力、興味	45.お気に入りの絵本作家ができた（2.2） 48.英語の絵本を自分でも書いてみたい（2.2）
英語教育への意識	54. 英語絵本の読み聞かせを将来自分の職業にしたいと思った (2.3)

これらの表から読み取れることを以下に述べる。表 5 からまず気づくことは、子どもへの意識を問うグループの設問 5 項目が全て含まれていることである。特に項目 30 と 32 は否定的な反応をする学生はいなかった。

第二に、英語についての意識等のグループでは、27 項目のうち、平均値が 3.5 以上であるのは 6 項目である。逆に、2.5 以下の項目は 2 項目しかない。それ以外の 19 項目は、2.6〜3.4 に含まれる。全体では 3.0 以上は 14 項目であり、2.9 以下は 13 項目で拮抗しているが、このグループの平均値は 3.1 であるので、全体としてはこの分野も前向きに捉えられていると解釈される。

第三に、絵本を通じた文学への興味については、平均値が 3.2 で、3.5 以上は 2 項目しかないが、3.0 以上は 13 項目中 11 項目であって、絵本の持つ文学的な側面に関心を引かれたことを示している。他方、関心を引かない項目も二つ挙がっている。

第四に、地域貢献への意識と英語教育についての意欲に関しては、特に強いまたは弱い意識や意欲はみられなかった。

5-3. 3 年間の活動から学生が得たもの

2014 年度当初、希望と目標をもって始めた本活動は、概ね期待通りの結果を得ることができた。まず、本活動は学生の「英語にふれる機会」を増やすことができた。特に、地域の子どもとのふれ合いは刺激になり、英語学習への意欲を高めたといえよう。アンケートの自由記述欄を見る限り、子どもたちにいかに楽しくわかりやすく絵本を読み聞かせられるかを考え、工夫しながら活動したことが、自身にも役に立ったという声が多かった。子どもたちの笑顔を見るために、学生同士が協力して英語の発音や音読練習を行ったり、助言したり励ましあったりしたことは、英語にふれる機会を一人の時よりもさらに豊かなものにした。

次に、学生は声を出して絵本を読むことから新たな学びを得た。子ども向けの本とはいえ、絵本に込められている言葉のニュアンスや韻や韻律は、英語を習得する上で重要な要素である。自由記述には、音に出して感情を込めて読むことが、そのまま英語への興味へと結びついたという声や、読み聞かせをすることで語彙が増えたという声もある。参加した学生の英語力はもともと TOEIC テストのスコアでいえば 300～500 点台がほとんどで、英語には興味があるが自信のある学生はいなかった。絵本はこれらの学生にとっては最初ハードルが低く、取り掛かりやすいものだったが、そのハードルは教員による発音やアクセント、そして読み方の指導や学生同士による助言等により、少しずつ上げられた。読み手という伝える立場になった学生は、ハードルを一つ一つ越えながら、絵本をよりよく理解し、より正しい発音やアクセントを学んで、子どもたちに読み聞かせ、その「成功体験」は自信につながったといえるであろう。

最後に、教室外で、本物（Authentic）の学びができたこと。学生は、教室という安全な練習の場から出て、どのような反応が来るかもわからない子どもたちへ読み聞かせを行うことで、座学では気づけない自分の英語力の弱点に気づき、主体的に改善しようと意識できるようになったといえる。自由記述には、実際に教室外で活動したことによって、それまであまり気にして来なかった、似ている単語の発音の違いに疑問を持ち調べることが多くなった、発音に気を付けるようになったという声があった。他にも、視野が広がった、将来の進路の参考になった、英語教員になったときにこの経験が役立つ、子どもへの苦手意識が無くなった、恥ずかしがらず発表できるようになった等の意見もみられた。英語に限らず、個々の学生が自らの課題を持って活動していたことがみてとれる。

おわりに

2014 年度から始めた本活動は、筆者の一人（辻川）により 2018 年度末まで続けられた。2017 年度は、学生募集停止を受けて英米語学科は入学者がおらず 1 年生は人間科学部コミュニケーション学科の所属となったが、コミュニケーション学科からの読み聞かせ活動参加はなく、2016 年度から継続した英米語学科の参加者 2 名（2 年生 1 名、3 年生 1 名）のみで 1 年間活動し、6 回保育園で読み聞かせを行った。2018 年度は、2017 年度から継続した英米語学科の 3 年生 1 名およびコミュニケーション学科の 2 年生 2 名の計 3 名で 1 年間活動し、保育園で計 4 回の読み聞かせを実施した。

2018 年度は英語が流暢な留学生 2 名も 1 回だけ活動に加わった。2017 年度、2018 年度にはアンケートを取らなかったため、本稿では触れなかったが、子どもたちの笑顔が増えるよう、学生が意欲的に読み聞かせの準備をし、保育園に出かけていったことは 2014 年度以来変わることはなかった。

活動が細くなっていったのは、英米語学科の廃止が主な要因であるが、2016 年度に途中で止めた学生が述べた理由も重要である。2016 年度に英米語学科に入学したての学生は、英語を学ぶ意欲が高く、英語絵本の読み聞かせにも興味を持って参加してはみたものの、学期が進むにつれて予想外に授業に関する英語の勉強が大変だと気づき、活動をやめるに至ったケースがほとんどである。当時の英米語学科の人数は 1 学年が約 30 名弱から 40 数名の間で、単位が取得できるわけでもなく、サークル活動でもない英語絵本の読み聞かせ活動に定期的に参加する意欲・余力のある学生は数十名に一名程度といったところであった。2017 年度以降は上述のように大学改組により、学生ボランティア募集はさらに困難となっていった。

これらの経験は、今後の英語絵本の読み聞かせ活動を実施するために大切な気づきを与えてくれる。それは、英語絵本読み聞かせ活動の意義、本研究を含む先行研究で明かされている参加学生にとってのメリットをきちんと整理して伝えていく必要性である。自身の英語力に自信をつけるだけではなく、早期英語教育の影響を受けている子どもたちの役に立てるという双方向の活動であることと共に、英語を使ったユニークなボランティア活動として就職活動でアピールできることも伝えたい。実際、就職活動の面接でこの活動の話をしたところ、非常に感触がよかったと言う学生がいた。そして、この活動に意欲的に取り組んだ学生の中には、英語教員や英会話講師、図書館司書になった学生もいる。「忙しくても自分にとって有益だから参加したい」と思える活動を実施していかねばならない。

さらに、このボランティア活動を経験して卒業していった学生たちは、数年後にこの経験をどう振り返っているか、インタビュー等を実施してその後の意識を追っていきたい。そうすることで、本活動の意義や影響力を確認、評価し、さらなる改善ができると考える。

謝辞

この論文の査読や編集をして下さった方々に心より感謝申し上げます。

注

1）関西国際大学のホームページには、2014 年 10 月 21 日に英語教育学科 4 年生が、尼崎市立立花南小学校で、英語絵本の読み聞かせを実施したことが紹介されている（https://www.kuins.ac.jp/news/news_3064.html）。

2）文教学院大学の子ども英語教育センターのホームページには、2014 年 5 月 30 日に文教幼稚園の園児にむけて大学生が英語絵本の読み聞かせ実習を行ったことが記されている（https://www.u-bunkyo.ac.jp/center/clec/2014/05/post-8.html）。

3）京都光華女子大学のホームページによれば、2019 年 2 月 7 日にこども教育学科の学生の実習先の保育園で英語絵本の読み聞かせ会が行われたとある（https://www.koka.ac.jp/news/7586/）。

4） これは茨城大学地域連携プロジェクトの学生地域参画プロジェクト（2018 年度）に参加した「飛びこめ！地域！プロジェクト～かすみがうら市と常陸大宮市編～」が、県立図書館の試験的な企画「茨城大学生による英語で読み聞かせ」に協力して実施したものである。茨城県教育委員会のホームページ「フォトニュース」（平成 30 年 6 月 25 日）（2021 年 10 月 4 日閲覧）
（https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/topics/news/photo/h30/06/0621-6.html）

5） 文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説『外国語・外国語活動』、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』参照。

参考文献

畑江美佳（2012）「小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用」『融合文化研究』第 18 号, 2-13.

早川知江（2015）「『小学校外国語活動』での絵本の活用の留意点：Hi,Friends！を例に」『名古屋芸術大学研究紀要』第 36 号, 171-190.

早川知江（2021）「小学校「外国語」「外国語活動」における絵本読み聞かせ技術の向上をめざして」『名古屋芸術大学研究紀要』第 42 号, 267-288.

城一道子（2015）「英語絵本の読み聞かせに対する学生の態度－ 教員養成課程における試み－」『教育総合研究：江戸川大学教職課程センター紀要』第 3 号, 1-10.

狩野晶子・Gould Timothy (2010)「児童英語教育ボランティア活動が教える側の学生にもたらすもの」『上智短期大学紀要』第 30 号, 45-81.

川村一代（2018）「伊勢図書館での学生の英語の絵本の読み聞かせ活動」『皇學館大學紀要』56 輯, 115-126.

小玉容子・キッド ダスティン（2014）「短期大学における幼児・児童向け英語教育の実践：教材研究と学生の学びについて」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第 52 号, 187-194.

小玉容子・キッド ダスティン（2016）「小学校での『英語絵本読み聞かせ』実践報告」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第 54 号, 177-182.

昆布孝子（2013）「教材として英語絵本を活用　幼児教育学科における英語演習の授業」『紀要』（奈良文化女子短期大学）第 44 号, 137-146.

昆布孝子（2014）「教材として英語絵本の活用(2)－英語絵本の多読授業－」『紀要』（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）第 45 号, 139-148.

昆布孝子（2015）「幼児教育学科における英語学習－保育英語と英語絵本－」『紀要』（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）第 46 号, 171-186.

河内山有佐（2021）「絵本を活用した英語の遠隔授業の可能性」『和洋女子大学英文学会誌』第 56 号, 39-51.

松井千代（2017）「保育系短期大学生の地域交流活動－幼児・小学生との英語あそびと外国人児童支援を通して－」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域協働研究』第 3 号, 89-94.

松久保暁子 (2009)「児童英語教育支援プログラムの試み－学生指導の立場から－」『OBIRIN TODAY: 教育の現場から』第 10 号, 113-127.

松本由美（2015）「初期英語教育における絵本の有効活用－児童の自発的反応を引出す「読み聞かせ」の試み－」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第 8 号, 35-42.

松浦友里・伊東英（2012）「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究－第二言語習得研究におけるインプット理論の視点から－」『岐阜大学カリキュラム開発研究』vol.29, no.1, 94-101.

オチャンテ・カルロス（2019）「小学校英語教科指導法における絵本の読み聞かせの有効性－絵本を活用した模擬授業の具体例を通して－」『人間教育』（奈良学園大学人間教育学部）第 2 巻, 第 1 号, 27-33.

大川陽子（2014）「小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究－児童の発達段階に応じた英語絵本の活用－」『鳴門教育大学小学校英語研究センター紀要』第 5 号, 31-40.

長田恵理（2018）「小学校外国語教育における絵本の活用：指導者が選ぶ英語絵本」『國學院大學人間開発学研究』第 9 号, 39-56.

大津理香・辻川美和（2015）「大学生が英語の絵本の読み聞かせ活動を通して得たもの」『英語学・英語教育研究』第20巻, 34号, 49-70.

大津理香（2020）「英語絵本の読み聞かせ活動－読み聞かせる側である大学生への影響－」『茨城大学全学教育機構論集　大学教育研究』第 3 号, 79-93.

大津理香（2021）「大学生が英語絵本の読み聞かせ活動を通して得たもの－常磐大学 2015 年度の活動から－」*LEORNIAN*, 第 25 号, 3-18.

佐藤久美子・佐藤綾乃（2010）「L2 小学生の英語絵本の理解過程と読解ストラテジー」『小学校英語教育学会紀要』第 10 巻, 43-48.

師子鹿元美（2017）「小学校の外国語活動における英語絵本の活用についての調査研究」『別府大学短期大学部紀要』第 36 号, 91-99.

田中真由美・小野奈々子（2018）「絵本を活用した外国語活動を通して豊かになっていくことば」『中部地区英語教育学会紀要』第 47 巻, 237-244.

内山寿彦・染谷藤重（2020）「小学 5 年生における英語絵本読み聞かせがアルファベット学習に与える影響－児童の動機づけに焦点を当てて－」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第 7 巻, 225-232.

萬谷隆一（2009）「小学校英語活動における絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要　教育科学編』第 60 巻, 第 1 号, 69-80.

吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子（2017）「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究－担任が無理なく取り組める手法を探る－」『福井県教育研究所研究紀要』第 122 号, 122-133.

添付資料 1:

2016 年度　アンケートの結果（設問項目と回答者の分布）

	そう思わない	やや思わない	やや思う	そう思う	平均値
1. 英語が好きになった		3	3	2	2.9
2. 英語の正しい表現を使うよう意識するようになった		1	4	3	3.3
3. 英語はたとえ間違ってしまっても身振り手振りなどで何とか伝わるのだと感じた	1		5	2	3.0
4. 英語の語彙や文法は大切だと思うようになった			4	4	3.5
5. 自分の英語に自信が持てるようになった	2	2	4		2.3
6. リスニングの練習を普段取り入れるようになった	1	3	3	1	2.5
7. 英語の単語の意味や文法に気をつけるようになった		2	2	4	3.3
8. 英語の辞書を引くようになった		1	2	5	3.5
9. 英語の発音やアクセントを意識して改善するようになった			7	1	3.1
10. 毎日少しは英語の音読をしないと気がすまなくなった	2	4	2		2.0
11. 毎日少しは英語を読まないと気がすまない		5	3		2.4
12. 毎日少しは英語を聞かないと気がすまなくなった		6	2		2.3
13. 英語にふれる機会が増えた			5	3	3.4
14. 英語の語彙が増えた		1	4	3	3.3
15. 文法が自然と使いこなせるようになった	1	3	2	2	2.6
16. 英語の自然な使い方を学べたという実感がある		3	5		2.6
17. 人前で臆せず大きな声で話せるようになった	2	1	2	3	2.8
18. 英語を話すとき、身振り、手振りを交えて話すことが増えた	1	2	2	3	2.9
19. 自分の言いたいことが、意外にシンプルな英語で表現できるようになった	1	3	1	3	2.8
20. 相手に伝わっているかどうかを気にしながら話せるようになった		1	4	3	3.3
21. 英語のリズムに乗って話せるようになった	1	2	4	1	2.6
22. 英語のスピーキング力がついた		4	3	1	2.6
23. 日本語を英訳して話すのではなく、英語がそのままでてくるようになった		5	2	1	2.5
24. 英語の聞きとりがよくなった		5	3		2.4
25. 英語が多く使われる授業などで、苦労しなくなった		4	3	1	2.6
26. 英語を話すとき, 相手に何とか伝えようという意志がより高まった		2	4	2	3.0
27. もっと英語を勉強したくなった		1	6	1	3.0
英語についての意識、英語の関する能力、意欲について	12	64	91	49	2.8
28. 子どもが好きになった		1	2	5	3.5
29. 子どもから学ぶことが多かった		1	1	6	3.6
30. 自分の知っている英語の面白さを子どもに伝えたいと思った			3	5	3.6

31. 子どもの期待にこたえるために頑張っている自分がいる		2	1	5	3.4
32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる			4	4	3.5
子どもへの意識		4	11	25	3.5
33. 自分は地域に貢献しているという自覚と誇りが生まれた		3	4	1	2.8
34. 地域貢献しながら、自分のためにかけがえのない学びをしていると思った		4	3	1	2.6
35. 地域貢献へのさらなる興味がうまれた		3	4	1	2.8
36 .他の学生とともに地域の子どもたちのために活動することが楽しくなった		4	3	1	2.6
37. 他の学生と協力すればもっと地域貢献できると思った		2	5	1	2.9
地域貢献への意識		16	19	5	2.7
38. 英語の絵本への興味が増した		1	5	2	3.1
39. 英語の絵本のストーリーのおもしろさが理解できるようになった			6	2	3.3
40. 英語の絵本の言葉のニュアンス(音の響きや感じなどの微妙な違い)がわかるようになった			7	1	3.1
41. 英語の絵本の韻（文章中に chair と bear など似た音が一定の間隔で出てくること）に気づくようになった			2	6	3.8
42. 絵本の英語の韻を楽しめるようになった		1	2	5	3.5
43. 絵本の英語のリズム（調律）に気づくようになった		1	3	4	3.4
44. 絵本の英語のリズム（韻律）を楽しめるようになった		3	2	3	3.0
45. お気に入りの絵本作家ができた	2	5	1		1.9
46. 英語の絵本をもっと読みたい	1	1	4	2	2.9
47. ORT などの多読への意欲が高まった	1	2	4	1	2.6
48. 英語の絵本を自分でも書いてみたい	4	3		1	1.8
49. 英語で書かれた文学作品にもっと触れたくなった		2	3	3	3.1
50. 英語の児童文学にも興味がわいた			6	2	3.3
文学的な能力、興味	8	19	45	32	3.0
51. 英語を教える自信がついた		4	4		2.5
52. 英語教育（児童への）にも興味がわいた	1	1	4	2	2.9
53. 子どもをもつ親への英語絵本の読み聞かせ指導に興味がわいた	1	3	3	1	2.5
54. 英語絵本の読み聞かせを将来自分の職業にしたいと思った	3	3	2		1.9
55. 大学を卒業した後も、英語の絵本の読み聞かせを子どものためにやってみたいと思った	2	2	4		2.3
英語教育への意識	7	13	17	3	2.4
全体	27	117	182	113	2.9

添付資料２：

アンケートの結果（設問項目と回答者の分布）2014 年度、2015 年度、2016 年度の合計

	そう思わない	やや思わない	やや思う	そう思う	平均値
1. 英語が好きになった		3	6	8	3.3
2. 英語の正しい表現を使うよう意識するようになった		1	7	9	3.5
3. 英語はたとえ間違ってしまっても身振り手振りなどで何とか伝わるのだと感じた	1	1	7	8	3.3
4. 英語の語彙や文法は大切だと思うようになった			7	10	3.6
5. 自分の英語に自信が持てるようになった	3	3	9	2	2.6
6. リスニングの練習を普段取り入れるようになった	1	5	6	5	2.9
7. 英語の単語の意味や文法に気をつけるようになった		2	4	11	3.5
8. 英語の辞書を引くようになった		1	3	13	3.7
9. 英語の発音やアクセントを意識して改善するようになった		1	11	5	3.2
10. 毎日少しは英語の音読をしないと気がすまなくなった	2	7	8		2.4
11. 毎日少しは英語を読まないと気がすまない		7	6	4	2.8
12. 毎日少しは英語を聞かないと気がすまなくなった		7	7	3	2.8
13. 英語にふれる機会が増えた			7	10	3.6
14. 英語の語彙が増えた		2	5	10	3.5
15. 文法が自然と使いこなせるようになった	2	5	8	2	2.6
16. 英語の自然な使い方を学べたという実感がある		4	12	1	2.8
17. 人前で臆せず大きな声で話せるようになった	2	2	7	6	3.0
18. 英語を話すとき、身振り、手振りを交えて話すことが増えた	1	2	7	7	3.2
19. 自分の言いたいことが、意外にシンプルな英語で表現できるようになった	2	4	5	6	2.9
20. 相手に伝わっているかどうかを気にしながら話せるようになった		1	8	8	3.4
21. 英語のリズムに乗って話せるようになった	1	4	11	1	2.8
22. 英語のスピーキング力がついた	1	8	6	2	2.5
23. 日本語を英訳して話すのではなく、英語がそのままでてくるようになった	1	7	6	3	2.6
24. 英語の聞きとりがよくなった		7	7	3	2.8
25. 英語が多く使われる授業などで、苦労しなくなった	2	4	7	4	2.8
26. 英語を話すとき，相手に何とか伝えようという意志がより高まった		3	5	9	3.4
27. もっと英語を勉強したくなった		1	8	8	3.4
英語についての意識、英語の関する能力、意欲について	17	92	190	158	3.1
28. 子どもが好きになった		1	5	11	3.6
29. 子どもから学ぶことが多かった		3	2	12	3.5
30. 自分の知っている英語の面白さを子どもに伝えたいと思った			5	12	3.7

31. 子どもの期待にこたえるために頑張っている自分がいる		2	2	13	3.6
32. 子どもの学ぶ姿を見て、自分の英語学習のモチベーションもあがる			6	11	3.6
子どもへの意識		6	20	59	3.6
33. 自分は地域に貢献しているという自覚と誇りが生まれた		5	9	3	2.9
34. 地域貢献しながら、自分のためにかけがえのない学びをしていると思った		6	6	5	2.9
35. 地域貢献へのさらなる興味がうまれた		4	7	6	3.1
36 .他の学生とともに地域の子どもたちのために活動することが楽しくなった		4	5	8	3.2
37. 他の学生と協力すればもっと地域貢献できると思った		2	8	7	3.3
地域貢献への意識		21	35	29	3.1
38. 英語の絵本への興味が増した		1	8	8	3.4
39. 英語の絵本のストーリーのおもしろさが理解できるようになった			8	9	3.5
40. 英語の絵本の言葉のニュアンス（音の響きや感じなどの微妙な違い）がわかるようになった			11	6	3.4
41. 英語の絵本の韻（文章中に chair と bear など似た音が一定の間隔で出てくること）に気づくようになった		3	4	10	3.4
42. 絵本の英語の韻を楽しめるようになった		2	5	10	3.5
43. 絵本の英語のリズム（調律）に気づくようになった		1	9	7	3.4
44. 絵本の英語のリズム（韻律）を楽しめるようになった		3	7	7	3.3
45. お気に入りの絵本作家ができた	4	8	3	2	2.2
46. 英語の絵本をもっと読みたい	1	1	7	8	3.2
47. ORT などの多読への意欲が高まった	1	3	8	5	3.0
48. 英語の絵本を自分でも書いてみたい	7	5		5	2.2
49. 英語で書かれた文学作品にもっと触れたくなった		2	6	9	3.4
50. 英語の児童文学にも興味がわいた		1	8	8	3.4
文学的な能力、興味	13	30	84	94	3.2
51. 英語を教える自信がついた		6	9	2	2.8
52. 英語教育（児童への）にも興味がわいた	1	2	6	8	3.2
53. 子どもをもつ親への英語絵本の読み聞かせ指導に興味がわいた	1	4	5	7	3.1
54. 英語絵本の読み聞かせを将来自分の職業にしたいと思った	4	6	5	2	2.3
55. 大学を卒業した後も、英語の絵本の読み聞かせを子どものためにやってみたいと思った	2	2	7	6	3.0
英語教育への意識	8	20	32	25	2.9
全体	38	169	361	365	3.1